
fire of greed

FrangBeat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

fire of greed

【Nコード】

N4146BA

【作者名】

FrangBeat

【あらすじ】

灼眼のシャナ×ゼロの使い魔。

2つの世界が1つになるとき、何が起こるのか。

灼眼のシャナの世界（前書き）

ひどく創造神祭礼の蛇のキャラが崩壊してます。
見たくない場合は戻るボタンを押してください。
それでもok! って方は小説をお読みください。

灼眼のシャナの世界

「……………そろそろ飽きた……」

『は?!』

- 遡ること数分前 -

「盟主!! 侵入者です!! おそらく……炎髪灼眼の討ち手です!!」

『シャナだ!』

「ふふふ……坂井悠二よ……」

『何だ。』

「世は気づいてしまった……」

『何がだ。』

「貧乳の素晴らしさを」

『黙れ。』

「いや……実に素晴らしい……巨乳よりはるかに小さく、その謙虚な胸のサイズ……実にすばらしい。」

『どうした蛇。長年生きていたからついに頭がいかれたか。』

「そういえば……………」

『どうした。』

「炎髪灼眼の討ち手も貧乳だったな。」

『シヤナを狙うな。この変態。どっかの鼻血を出して倒れる奴と一緒に倒れてろ。』

「それは、土○康太の事か。」

『名前を出すな、アホが。』

「じゃあ、○屋康太ならいいか？」

『隠せばいいということじゃない。バカたれ。』

『大体なぜ土○康○のことを知っている。』

「アニメが絶賛放送中だからさ キラッ」

『黙れ。（こいつ本当に徒かよ……………趣味が人間だな……………）』

「盟主!!!! 侵入されました!!!」

『来たか!』

「ブルートザウガーを出すのだ。」

『戦うのか。』

「いや。仲間になろうと思う。」

『何？なんでだ？』

「……………そろそろ飽きた……………」

『は？！』

「“逆理の裁者”ベルペオルは巨乳だ。興味がわかない。」

『“頂の座”ヘカテは。あいつも貧乳だろう。』

「奴は髪が短い。」

『はい？！』

「世は長い髪で貧乳のやつが好みなのだ。」

『だいたい……………どこで貧乳のことを知った。』

「ちよいとばかり、夜中にテレビを見ていてな。」

『ふむ。』

「そこで0の遣魔というアニメがあつてだな。そのヒロインが貧乳なのだ。」

『そうか……………』（こいつ救えないかもな……………）

「盟主!!!来ます!!!」

「ふむ・・・」

ガキン!!!!!!!!!!!!

“炎髪灼眼の討ち手”シャナの持つ“贅殿遮那”と“祭礼の蛇”の持つ“ブルートザウガー”のぶつかる音がした。

「お前が祭礼の蛇か!!!」

「そう。世こそが創造神祭礼の蛇。」

「雄二・・・いやいや・・・悠二を返しなさい。」

『いや。もうすぐ帰るさ。シャナ。』

「どういつこと?!悠二。」

『それはこの創造神祭礼の蛇に聞いてくれ。』

「どういつこと?!」

「・・・そろそろ飽きたのだ・・・」

「は?!」

「世は“貧乳”というものに惹かれてな・・・巨乳よりはるかに小さく、その謙虚な胸の大きさ・・・実にすばらしい。」

「!?!?!?!?!ちよつと!どこ見てんの!誰が貧乳よ!」

「後、二一ハイというの物にも惹かれた。」

（もういつ…）

「炎髪灼眼の討ち手よ。」

「何？」

「少しばかりお願いがある。」

「何？」

「その二一ハイを履いた脚で世を踏んでくれ。」

「ふ・・！踏む？！」

（もう、こいつ本当に救えねえ……）

ギム。

シャナは祭礼の蛇を踏んづけた。

「おおぅ……これが二一八イの感触……。たまらん……。たまらんぞおおおおおおお!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!」

『（もう疲れた・・・）』

「はぁ・・・はぁ・・・とりあえずだ。」

「？」

「世は炎髪灼眼の討ち手の仲間になる。よいか？」

「・・・・・・まあ・・・良いけど・・・なんで飽きたの？？」

「“逆理の裁者”ベルペオルは巨乳だ。興味がわかない。」

『“頂の座”ヘカテーは？』

「奴は髪が短い。」

『え?!』

「世は長い髪で貧乳のやつが好みなのだ。」

「それって思い切りあたしの事じゃない!!!!!!!!!!!!!!」

祭礼の蛇は殴られてどこかへ飛んで行った。

・・・とりあえず・・・創造神祭礼の蛇が仲間になった。

星黎殿の盟主は“変態”シュドナイいやいや・・・“千変”シュドナイがなったようだ。

灼眼のシャナの世界

『シャナ。いいの？こんな“変態”で“ドM”で“貧乳”好きの“ロリコン”が仲間で。』

「酷い言われようだな・・・世をぶじよ・・・」

『黙れ蛇。今日からお前は変態スネークだ。』

「変態スネーク・・・？いい響きだ・・・キラッ」

『こいつ本当にもう救えない域にいるな。』

「まあ、こいつが仲間なら星黎殿の連中を倒しやすくなるし。」

「そして世は炎髪灼眼の討ち手の貧乳を拝め・・・」

「黙って。変態スネーク。」

「炎髪灼眼の討ち手までそのようなことを・・・」

・創造神祭礼の蛇はどうしようもない変態になってしまいました。

「ナレーターまで世を侮辱するつもりか・・・本編に出ておらぬくせに・・・」

・気にするな。いずれ会う。

「どうだかわからないが、会った時がお前の墓場だ。」

・誰が変態スネークにやられるか。

「やってやるぞ．．．世は有言実行派なのだ。」

・おいおい。ノンケでも食っちまうてか??怖い怖い．．．

『なあ。こいつ大丈夫か．．?独り言言ってるけど．．．』

「まあ．．．大丈夫なんじゃない．．?それより悠二。」

『ん?』

「星黎殿の連中。基。“逆理の裁者”ベルペオルや“頂の座”ヘカテ。“千変”シュドナイはどうやって倒す?」

『ああ。それなら簡単だよ。今から倒しに行ける。』

「え?本当に?」

『うん。まあ、精神的にね。』

「精神的．．．なんか怖いわね．．．」

『行こうか。』

「う、うん．．．」

こうして、坂井悠二と“炎髪灼眼の討ち手”シャナ、そして変態スネークはベルペオル、ヘカテ、シュドナイを（精神的に）倒すた

めに星黎殿に向かった。

灼眼のシャナの世界（後書き）

酷いキャラ崩壊ですねwwwすいませんwww

ゼロの使い魔の世界

「うゝん……」

朝。桃色がかったブロンドの長い髪。鳶色の眼をしたその少女は、いつも通り目を覚ました。

「才人……？」

「くかゝっ……」

才人と呼ばれるその少年はベッドの上でまだ寝ていた。

「もう……ご主人様より後に起きることになるじゃない……バカ犬……」

一応説明しておくが、ご主人様と主従みたいなプレイではありません。ん。

「ああ……ルイズ……おはよう……」

「おはようじゃないわよ！ご主人様より遅く起きるなんて！」

「ごめん……ルイズ……」

「もう……早く起きて。」

少女の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

ヴァリエール家の三女。16歳。

比較的に小柄。そのために自分のスタイルにコンプレックスを抱いている。特にむ。ww

この少女と言えば、あの某蛇がこの少女を見て『貧乳』に惹かれた。二ーハイも同じである。

「今起きるよ……」

少年の名前は平賀才人。17歳。

元々は地球の人間だったが、ルイズの召喚魔法によりハルケギニアに召喚された。

神の左手・ガンダールヴを持つ。

「おう。相棒。お目覚めかぁ〜い？女の子を先に起こすようでないじゃない！」

この喋る剣はデルフリンガー。才人が愛用している片刃の長剣で、意思を持つ魔剣「インテリジェンスソード」。時々、言わなくていいようなことまでしゃべる。

「何だよデルフまで……」

「今日は授業があるんだから……遅れたらたいへん……あ〜！もうこんな時間！遅れる〜！」

「朝から騒がしいな……」

- 授業 -

「さて・・・この時間は前回すべてをやってしまったので自習の時間にします。」

所々から歓喜の声が。・・・その時。

ドカアアアアアアン！！！！

教室の壁が壊れた。

土煙の中から姿を現したのは見たことのない服装と武器を持った三人の人間らしき人物だった。

「へえゝ・・・こんな所に人間がたくさん。存在の力を大量に手に入れられるわね。」

「ああゝ・・・俺の愛しい・・・」

「・・・黙って・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ヘカテ・・・・・・・・」

「お前ら！！何者だ！！」

「おや？威勢のいい子供がいるねゝ・・・・・・・・喰らいがいがあるわ・・・・・・・・」

「何？！」

才人はすぐさまデルフリンガーを構えた。

「おや。そちらにも武器があるのね・・・ブルートザウガーのような。」

「ブルートザウガー??知らないな。これはデルフリンガーだ!!」

「どっちでもいいさ。愛しのヘカテーのために俺は存在の力を狩りまくるだけだ。」

「存在の・・・」

「力・・・?」

「知る必要はない。どうせこの全員死ぬ。トーチとして身代わりを置いてやるがな。」

「貴様ら・・・!」

しばらく才人と謎の集団はにらみ合った。

ゼロの使い魔の世界（後書き）

ゼロの使い魔の世界はここで終了です。

シャナ×ゼロ使の世界

「待て！！！！！」

突然その集団の後ろから声がした。

「ベルペオル！！！！まだ倒れていないか！」

「ふん！さっきのは若干きいたが今度は違う。ここにある存在の力すべて喰らってやるのさ。」

『そんなことさせるか！！行くぞ！変態スネーク！』

「おう！！！！ってだからそれを言うな！」

（何だ・・・・？？あいつら・・・・味方であるのは間違いなさそうだ・・・・）

「その人たち！！こっちに行けば広い場所が！！！」

『うん！ありがとう！案内お願い！』

「こっちだ！！！」

4人は走った。

挑発するかのように。

「はぁ・・・・はぁ・・・・ここなら大丈夫だ・・・・」

「ところで・・・あんなたちは？」

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。ルイズで良いわ。」

「私は“炎髪灼眼の討ち手”シャナ！」

「俺は平賀才人。」

『僕は坂井悠二』

「そして世は・・・」

『お前はいい。』

「（´・ω・｀） ショボーン」

「よろしく。シャナと悠二。」

「うん。よろしく。」

「それであいつらは？？何者なの？？」

「あいつらは紅世の徒。“逆理の裁者”ベルペオル、“頂の座”ヘカテー、そして“千変”シュドナイ。」

「存在の力がどうか・・・」

「存在の力は人が生きるために必要な言わば炎。それを消してしま

うのが奴ら。そして存在の力が亡くなったものは“トーチ”、身代わり人形となつてその人になり替わる。一定期間だけね。」

「そう……とりあえず……戦えば万事解決ね……」

「そういうこと……行くわよ……」

「おう……」

「えっと……世は……」

『お前はいい。』

「（・・・） ショボーン（・・・） ショボーン」

シヤナ×ゼロ使の世界（前書き）

ベルペオル、ヘカデー、シュドナイもキャラ崩壊します

シャナ×ゼロ使の世界

「行くぞ!!」

ルイズ、才人、シャナ、悠二（変態スネーク）は戦った。

ルイズは虚無の力を使い、シャナはフレイムヘイズの力。才人はガンダールヴの力を。悠二は祭礼の蛇の力を。

ただし、悠二だけは言ったように“精神的に”攻撃してます
←こんな感じ。

『ベルペオル、ヘカテー、シュドナイ!!!これからお前達を精神的に倒す!!』

「何だと?!やってみろ!」

『これを見る!!』

「これは!!!盟主!!」

「ベルペオル……予は貧乳に惹かれた。」

「はい?!」

「だから巨乳であるお前に興味が無くなった。だから星黎殿を抜けたのだ。」

「盟主……ヘカテーも貧乳なのでは?!」

「奴は髪が短い。予は髪が長く、貧乳で二ーハイが好きなのだ。」

「盟主……変態……」

「はははははは！……！！……！！変態か！……！！良い響きだ……ゾクゾクする……」

「ふん！盟主がいなければヘカテーは俺のものだ。なあ、ヘカ……」

プイ。

「なああああぜだあああああああ！！！！！！！！なぜ盟主いなくなつたのにヘカテーは俺に振り向いてくれないのだあああああ！！」

「（このおじさん……嫌い……気持ち悪い……）」

悠：『すごいなこいつ……半端じゃねえ……』

ル：「吐き気がするんだけど……」

シャ：「私も……」

才：「俺も……」

そう。盟主、創造神祭礼の蛇が星黎殿を抜けてもヘカテーのシュドナイに対する扱いは変わっていなかった。

シュドナイはアホだからそれに気づかずに暴れだした。

「ヘカテエエエエエエエエエエー!!!!!!!!!!!!!!」

へ：「シュドナイ・・・・・・・・うるさい・・・・・・・・」

ドス！

シュ：「ぐほあ！」

シュドナイ、ヘカテーに倒される。

シャナ&ルイズ&才人&悠二：「あ。」

「盟主・・・・・・・・盟主・・・・・・・・」

ベルペオル、精神的に病む。

シャナ&ルイズ&才人&悠二：「あいつは倒したな。残るは・・・・」

ヘカテー：「・・・・・・・・才エ・・・・」

才：「吐いたぞ。」

悠：「多分シュドナイが気持ち悪かったんだろう。」

才：「そうだな。」

へ：「オエ・・・・・・・・」

才：「あれも倒したとみていいな。」

悠：「ああ。」

ヘカテー、シュドナイの気持ち悪さにやられる。

ベ：「くそ！！覚えてなさい！！」

ヘカテー、シュドナイ、ベルペオルは帰って行った。

こうしてハルケギニアには平和が訪れた。

「……………今回のこの小説では……………出番がなかったのであります。」

「孤立無援……………」

「しかし、あの平賀才人と坂井悠二は同じ声で気持ち悪いのであります。」

「同一人物……………」

どこかの柱の陰から“万条の仕手”ヴィルヘルミナ・カルメルが覗いていた。

シャナ×ゼロ使の世界（後書き）

ありがとうございました。この小説はこれで終わりです。
いかがだったでしょうか。楽しんでただけていれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4146ba/>

fire of greed

2012年1月15日04時52分発行